

福 井 県 医 師 会

だより

第705号 令和2年(2020)3月



陽を待つ日々

福井市 平野 治和

表紙写真説明：陽を待つ日々

福井市 平野 治和

抽象画は見る人に委ねられているところがあります。描くほうも見るほうも自由度の高いところが魅力です。中世ヨーロッパの宗教画はその対極にあります。具象画家として戦後フランスを代表するベルナール・ビュフェ（1928-1999）は、「絵画は一瞥するだけで良い」と言いました。

醫 縫 録

敦賀医療センターの現状と 地域医療の変遷

国立病院機構敦賀医療センター院長 飯 田 敦



2019年4月1日に独立行政法人国立病院機構敦賀医療センターの病院長を拜命した飯田敦と申します。平素より敦賀市医師会、三方郡医師会をはじめ福井県医師会の先生方には大変お世話になっております。

当院の概要は前任の半田裕二名誉院長が平成25年・第623号の醫縫録にも書かれている通り、明治31年に敦賀衛成病院として創設され、昭和11年に敦賀陸軍病院、昭和20年に厚生省に移管され国立敦賀病院、さらに平成15年に重症心身障害者病棟を主に運営していた国立療養所福井病院と統合され国立福井病院となり、平成16年に独立行政法人国立病院機構福井病院、平成28年(2015年)4月1日に改称され独立行政法人国立病院機構敦賀医療センターとなり現在に至ります。現在は消化器がんを中心としたがん診療、緩和ケア医療、血液疾患診療、心疾患、整形外科疾患、白内障治療を中心とした地域の急性期・慢性期医療、小児輪番診療および重症心身障害者診療を担当しております。がん診療も変遷しており、手術は低侵襲化し内視鏡治療や薬物治療の比率が多くなっています。

地域の診療は医師会の先生方、地域中核の市立敦賀病院とともに敦賀・美浜・三方のいわゆる二州地区の医療を可能な限り地域完結型で行っております。また、重症心身障害者診療は、福井県嶺南東特別支援学校の先生方のお力も頂きながら地域での通所診療や嶺南を中心に福井全県下からの入院患者を受け入れる拠点となっております。

皆様ご存知の通り年齢別人口分布の変化に伴い2025年に向けた地域医療構想が推進されています。厚生労働省の推計では2025年には世帯主が65歳以上の世帯は全国5,000万世帯のうち1,840万世帯におよびその約70%が高齢夫婦のみあるいは高齢者一人暮らしになるとの報告も出ています。地方の病床再編は必須ですが、患者さん一人に関わる時間や手間の増加、徐々に増加す

る緩和的外科治療等の高齢者医療の変遷も見越して単に人口比率だけではなく機能維持を考えて必要医療者数を推計していかないと福井県の地域医療の維持が困難になるのではないかと憂慮しています。

私自身は福井大学消化器外科勤務を経て2015年に当院に赴任し現在に至ります。医療は常に変遷の中にありますが、近年は医師偏在、働き方改革も含め問題は山積しております。ただし医療は地域のインフラでもあり、まちづくりの一部でもあるものと思っております。頼ってくださる地域の声も聴きながら医師会の先生方と協力して地域医療に貢献できるよう改革を進めております。

前任地で個人的にもわずかに関わったロボット手術などの高度医療も世界的に進む一方で、地域の診療にも活かされる電子カルテやメディカルネットなどのカルテ閲覧、診療システムはすでに一般化され、内視鏡診断などの画像診断のAI化は広く実用される目下となっています。現在の病院玄関をながめれば電動スライドドアの車で送られてくるお年寄りや福祉車両で車いすごと来院される患者さんが増えています。次はやはり省力化を目指したAI診療でしょうか？自動運転の車で次々と体調の悪い方が病院玄関に押し寄せるのでしょうか？ゲノム医療の進歩も含めてほとんどの病気が血液などで診断し薬で軽快する時代が来るのでしょうか？iPS細胞で臓器のスペアを作る時代が来るのでしょうか？近未来の地域医療にもイノベーションの波が好影響をもたらしてくれることも期待しつつ変遷していきたいものです。ただしどれだけ変革が起ころうとも人の手、人の心が医療には一番大事だと思っております。

改めまして今後とも医師会の先生方のご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。